

12月15日 母校

所要で母校を訪れたときのこと。そこで教諭をしている同級生がわざわざ私を訪ねてくれて、こんな話を聞かせてくれた。

愛川くん覚えてる?卒業記念で2期生の全員が銅板に名前を刻んだこと。テニスコートの手前に今でも設置されてるから、帰りにでも見ていったら。

正直、全く覚えていなかった。声をかけてくれた彼女は、当時バレー部の花形選手で、目立たぬ劣等生の私とは真反対の存在。帰宅部で学校嫌いだった私とは高校時代の重みが違う。

用事を終えて、彼女に教えられた銅板を見に行った。緑青に覆われ、細かな傷だらけの銅板に確かに私の名前があった。同級生たちの名前も、そして彼女の名前も。嫌な思い出しかないと思っていた高校時代。けれども、なぜか温かな気持ちになった。どれもが思いのこもった、自筆の文字だった。

